

地水火風

牧野 恒一

御嶽山の噴火が一段落したと思つたら、今度は長野県北部を震源とする大きな地震が起き、阿蘇山や霧島連山では噴火活動が活発化するなど、日本列島の地殻構造が不安定な動きを見せている。今回は、これらの動きを追ってみた。

「長野県北部を震源とする地震」

平成26年11月22日の夜10時過ぎ、長野県北部を震源とするM6.7の地震が発生した。震源の深さは5kmと浅く、長野市、小谷村、小川村で震度6弱を記録した。死者はいなかったが、重傷者10人、軽傷者36人を出し、住家の被害は全壊33戸、

長野県北部の地震と火山活動の活発化

半壊60戸、一部破損684戸などとなっている。負傷者数、住家被害とも白馬村(震度5強)が突出しており、特に住家全壊が33件中27件、非住家被害が78件中72件と集中している。

市に入り、5時30分には富山県隊(5隊21名)が白馬村役場に到着して援活動には、東日本大震災の経験と、それを踏まえて緊急消防援助隊の態勢、資機材の整備などが進められたことが貢献している。

「指揮支援隊」というのは、大都市消防本部で大部隊を指揮する能力と経験がある人たちが構成された部隊だ。被災地域ごとに担当本部があらかじめ指定されており、出動要請があれば直ちにヘリコプターで被災地本部にかけつける。阪神・淡路大震災で、被災市町村

に応援部隊を指揮する余力が無かったために混乱した、という経験を踏まえて創設されたものだ。当時の混乱ぶりを思い起こせば、指揮支援隊が当然のように活躍している

「糸魚川―静岡構造線」は、千年に一度くらいの周期でM8クラスの大陸型地震を引き起こすのではないかとされており、前の地震が西暦762年でそれから既に1200年以上経っているため、特に警戒されている。30年以内の地震発生確率は14%とされており、日本の断層帯の中ではトップクラスだ。これに匹敵するのは、富士川口断層帯

動いたことから、先日の御嶽山の噴火との関連性も含め、地震研究者の間では1200年ぶりの大地震の発生を心配している人がいるのではなからうか。

だ。この噴火は、高温のマグマが地下から上昇することで発生する。火山性地震や火口直下で起きる孤立型微動も多い状態が続いており、山体が膨らむ僅かな地殻変動も観測されている。

しているのが目を引く。夜中の発災だったが応援隊の立ち上がりは早くて白馬村で地元消防本部や消防団と協力して捜索・救助活動にあたり、午前中には早くも捜索活動を完了している(以上、総務省消防庁災害速報)。

援活動とともに、主として白馬村で地元消防本部や消防団と協力して捜索・救助活動にあたり、午前中には早くも捜索活動を完了している(以上、総務省消防庁災害速報)。

震源が浅く被災地域がそれほど広くなかったことであろうが、素早い応援隊(5隊18名)が大町

の、大都市消防本部で大部隊を指揮する能力と経験がある人たちが構成された部隊だ。被災地域ごとに担当本部があらかじめ指定されており、出動要請があれば直ちにヘリコプターで被災地本部にかけつける。阪神・淡路大震災で、被災市町村

「大地震との関係は」 今回の地震の震源域は、「糸魚川―静岡構造線(日本を代表する大断層帯。昔「フォッサマグナ」と習ったことを覚えている)の一部を成す」神

増している。気象庁は、10月24日、小規模な噴火の可能性があると、硫黄山周辺に噴火警戒レベル2(火口周辺警戒)を発令した。2011年に噴火した新燃岳もマグマ蓄積量が3年前の噴火直前の水準にまで達していることだし、韓国岳、硫黄山、えびの高原周辺では火山性微動が確認されている。霧島連山全体の火山活動が活発化しているのが懸念される。

平成26年11月22日の夜10時過ぎ、長野県北部を震源とするM6.7の地震が発生した。震源の深さは5kmと浅く、長野市、小谷村、小川村で震度6弱を記録した。死者はいなかったが、重傷者10人、軽傷者36人を出し、住家の被害は全壊33戸、

市に入り、5時30分には富山県隊(5隊21名)が白馬村役場に到着して援活動には、東日本大震災の経験と、それを踏まえて緊急消防援助隊の態勢、資機材の整備などが進められたことが貢献している。

「指揮支援隊」というのは、大都市消防本部で大部隊を指揮する能力と経験がある人たちが構成された部隊だ。被災地域ごとに担当本部があらかじめ指定されており、出動要請があれば直ちにヘリコプターで被災地本部にかけつける。阪神・淡路大震災で、被災市町村

に応援部隊を指揮する余力が無かったために混乱した、という経験を踏まえて創設されたものだ。当時の混乱ぶりを思い起こせば、指揮支援隊が当然のように活躍している

「糸魚川―静岡構造線」は、千年に一度くらいの周期でM8クラスの大陸型地震を引き起こすのではないかとされており、前の地震が西暦762年でそれから既に1200年以上経っているため、特に警戒されている。30年以内の地震発生確率は14%とされており、日本の断層帯の中ではトップクラスだ。これに匹敵するのは、富士川口断層帯

動いたことから、先日の御嶽山の噴火との関連性も含め、地震研究者の間では1200年ぶりの大地震の発生を心配している人がいるのではなからうか。

だ。この噴火は、高温のマグマが地下から上昇することで発生する。火山性地震や火口直下で起きる孤立型微動も多い状態が続いており、山体が膨らむ僅かな地殻変動も観測されている。

増している。気象庁は、10月24日、小規模な噴火の可能性があると、硫黄山周辺に噴火警戒レベル2(火口周辺警戒)を発令した。2011年に噴火した新燃岳もマグマ蓄積量が3年前の噴火直前の水準にまで達していることだし、韓国岳、硫黄山、えびの高原周辺では火山性微動が確認されている。霧島連山全体の火山活動が活発化しているのが懸念される。